

# 連携医院のご紹介

今回は、苦痛の少ない検査・治療、少ない通院回数など、患者様の負担軽減を何よりも大切に考えておられる和田耳鼻咽喉科 和田先生です。



## 和田耳鼻咽喉科

〒734-0004  
広島市南区宇品神田5丁目5-9  
電話/082-256-1133  
院長/和田 秀毅  
診療科/耳鼻咽喉科



### ○いつ開業されましたか。

父親が昭和35年くらいに開業しました。平成4年に、私に代わりました。

### ○和田先生が診療において大切にされていることは何ですか。

できるだけ少ない通院回数で、さらに、できるだけ苦痛の少ない検査や治療で、患者さんの精神的・肉体的な負担を減らすことを一番考えています。

### ○開業されて、やりがいやおもしろさを感じるころはどんなところですか。

開業医として約20年やってきました。子どもの頃から診てきた患者さんが大人になり、今度は自分の子どもを連れて来てくれたりして嬉しいですね。特に、遠くの地域に引っ越ししていると本当に嬉しいです。また、診療を通じて患者さんの成長や変化を見ていけるというところはおもしろいと感じますね。

### ○先生にとっての県病院とはどういったところですか。

若い頃に3年間ほど勤めていました。私にとっては医者としての仕事のスタートとなった病院で、ある意味「出身病院」という感じです。県病院で育ててもらって、今の自分があると思います。

### 【取材後記】

和田先生をはじめ、スタッフの方々の優しい対応から、患者様の負担軽減を何よりも大切にしていることが本当に伝わってくるインタビューでした。今度は、趣味のスキューバダイビングのお話もぜひ伺いたいです。



# 地域巡回講演会を実施しています！

県立広島病院では、住民の皆様に病気の予防や治療について、最新の情報や正しい知識を理解していただくための『地域巡回講演会』を行っています。県内の町内会、老人会、PTAなどの各種団体にご利用いただいております。好評を得ています。



開催申込みについては、県立広島病院地域連携科までご連絡ください。

※詳しくは県立広島病院ホームページへ  
(URL: <http://www.hph.pref.hiroshima.jp/>)



## 外来診療のご案内

### ■診療受付時間

午前8時30分～午前11時00分  
※午後の診察は科によって異なります。

### ■休診日

土曜日・日曜日・祝祭日  
年末年始(12月29日～1月3日)

### ■紹介状持参のお願い

初診時、他の医療機関からの紹介状をお持ちでない場合、保険診療費のほか2,620円のお支払が必要となります。初診の際には、紹介状をお持ちください。

※当院では、予約診療を優先して診察しています。予約診療以外で受診されると待ち時間が長くなる場合がありますので、ご了承ください。

# もみじ



県立広島病院 〒734-8530 広島市南区宇品神田1丁目5番54号

※県立広島病院の様々な情報をホームページへ掲載しています。  
県立広島病院 で検索 (URL: <http://www.hph.pref.hiroshima.jp/>)

理念：県民の皆様に愛され信頼される病院をめざします

第38号  
2012.4.1  
発行

# 県病院ミュージアム

県病院内に展示している絵画を紹介します!!



桜の季節です。玄関ロビーで顔を上げてみてください。奥田元宋先生の素晴らしい桜の絵(タイトル「溪潤春耀」)が観賞できます。

院長 桑原 正雄



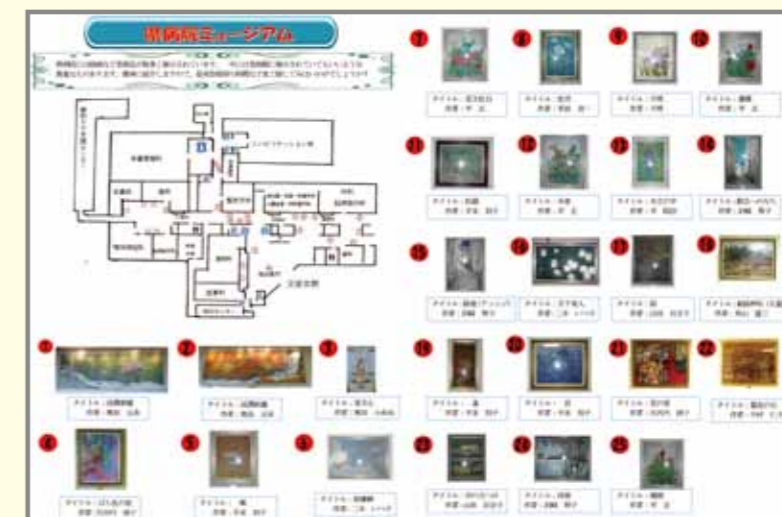
## Gallery Of Prefectural Hospital

県病院では、患者さんの療養環境の向上のために、様々な絵画などの美術品を展示しています。

中には、美術館に展示されていてもいいような貴重なものもあります。

このたび、こうした美術品を一枚にまとめた簡単なリーフレットを作成しました。

広報誌「もみじ」と一緒に、院内各所の配架コーナーに設置しておりますので、よろしければ手にとっていただき、様々な美術品をお楽しみください。



【県病院ミュージアムリーフレット】



# 診療科だより

第17回

何よりも、患者さんの安全を第一に考えています

## 麻酔科

今回は、麻酔科の中尾主任部長に直撃インタビューです!!

### はじめに、「麻酔科」について教えてください。

麻酔科はその名のとおり、手術麻酔管理が主な仕事です。これに加えて、術中の呼吸循環管理のエキスパートであることから集中治療や救急医療へ、疼痛管理に精通していることからペインクリニックや緩和ケアへと、その診療領域を広げてきました。



中尾 主任部長  
なかお

しかし、現在はこれらの領域も独立した診療科ができ、どこまで麻酔科医が関わるかは施設ごとに異なります。当院の麻酔科は、手術（一部検査）の麻酔管理と、ペインクリニック外来で慢性痛や緩和ケアから紹介された癌性疼痛の治療を行っています。

手術件数は毎年右肩上がりに伸びていますが、それと比例して麻酔科管理件数もこの3年間で500件増加し、平成22年度は4335件でした。手術室数はこの15年間10室のままですから、各診療科の協力のもと、効率的な手術室の運営が求められています。

### 麻酔科では、どのような診療が、どんなスタッフによって行われていますか？

麻酔科スタッフは現在11名です。後期研修医1名（現在育休中）を除き、全員麻酔科標榜医であり、8名は麻酔科専門医です。

麻酔科の中にも産科麻酔、小児麻酔、心臓血管麻酔など、いくつかの専門領域があります。当院には成育医療センターがあるため、合併症のある妊婦の帝王切開や、小児の全身麻酔管理が多いのが特徴です。とくに乳児・新生児は他院と比べて非常に多く、他では経験できない難しい患者の管理を行っています。

心臓血管麻酔では経食道心エコー（TEE）で評価しながら管理するのが標準となってきました。TEEは認定試験があり、合格者はまだ少ないのですが、当院では宮崎明子先生、新畑知子先生、桜井由佳先生が認定医です。

ペインクリニック外来は週3回、午前中のみ診療を行っています。入院治療は行っていません。火曜日と木曜日は黒川博己先生、金曜日は竹崎亨先生と桜井

由佳先生が担当しています。黒川博己先生と竹崎亨先生はペインクリニック専門医です。診療を行っている疾患は、帯状疱疹後神経痛、糖尿病性末梢神経障害による疼痛、腰下肢痛や頸肩腕痛、筋・筋膜性疼痛、整形外科的治療の適応外や診断治療されても改善が難しい疼痛などです。これらの疾患に対して、神経ブロック治療、低出力レーザー照射、点滴・内服の薬物治療を行っています。また顔面神経麻痺は皮膚科の治療、突発性難聴は耳鼻科の治療と並行して星状神経節ブロック、あるいはその近傍にレーザー照射を行っています。その他、三叉神経痛や多汗症などの特殊な神経ブロック治療が必要な疾患については広島大学病院に紹介しています。

術前診察は手術前日に麻酔担当医が行うのがほとんどですが、休日に入院する患者、重篤な合併症のある患者のコンサルトに対しては、ペインクリニック外来で行っています。午後の手術に影響しないよう、午前11時までの受付とさせていただきます。

### 最後に、麻酔科としてここがけていることを教えてください。

ペインクリニックはいろいろな原因で起こる疼痛を治療していますが、手術麻酔管理は疾患の治療というより、手術という大きな侵襲から患者を守ることが求められています。したがって、何よりも患者の安全が第一です。その上で、詳細な術前評価をもとに、術中は患者に望ましい呼吸循環動態を維持し、術後は十分な鎮痛が得られるように心がけています。また手術室の効率的運用を考えて、手術室のリーダーと連携をとりながら、時間的なロスをできるだけ少なくしようと日々努力しています。



【麻酔科の皆さんです。】

# 外科医の独り言 no.7

## — コミュニケーション —

「外科医へ贈ることば」という本があります。この著者は外科医ですが、医学の父ヒポクラテスの時代から現代にいたるまでの有名無名の外科医の発言を広く集め、外科の魂に響く1500以上の金言・苦言が格言として掲載されています。多くの格言は、なるほど当たっているなど感心させられるものですが、中には現代では当てはまらない格言も含まれています。この本に医師と患者の会話に関する格言を3つ見つけました。

最初は、150年以上も前に活躍したイギリスの小児外科医の、「外科では目が最も大切、指はその次に大切、舌は最も大切ではない」という格言です。患者との間に会話はいらぬ、ということなのでしょう。今どきこんなことを言う外科医はいません。日本でいうと江戸時代末期の外科医ですから許してあげてください。次も150年くらい前のドイツの外科医ピロート先生の言葉です。この先生は世界で初めて胃癌の手術に成功し、現代でもこの先生が開発した方法が少し改良されて行われています。その先生の「患者は聞くよりも話したがる」という格言が残っています。患者はしゃべらなくていい、黙って医者話を聞け、というかなり上から目線の言葉です。こんな大先生だからその発言というより、やはり時代でしょうか。坂本竜馬や勝海舟が大政奉還に駆け回っていた時代ですよ、これも時代がそうさせたということ許してあげてください。最後は20世紀に活躍した

小児外科医の言葉、「患者に話しかけない外科医には、患者は自分の症状を訴えることができない」です。これは21世紀の現在にも通用する金言ですが、現在は患者に話しかけるだけではダメなのです。

「賢い患者は知っている 病院の使い方」という本の中にこう書いてありました。「患者の話をろくに聞かない」、「病名や病気の状態、原因をはっきり言わない」、「検査の理由や内容をきちんと説明しない」、「質問しても専門用語が多すぎてわかりにくい」、「質問すると不機嫌になる」、「やたらと検査をしたがる、薬を出したがる」医者はダメ医者である確率が高いと。ここでダメ医者であると言い切っていないところにホッとするのは私だけでしょうか？言い訳をするつもりはないのですが、あとで待っている患者さんが気になったり、検査をしなかったための見逃しを避けなければならないし・・・そういえば10年前に、明け方まで手術をした後そのまま外来で診察をしていた時に、患者さんの話を長々と拝聴している最中、つい居眠りをしたことがありました。「患者の前で居眠りする医者」はダメ医者とは書いてなかったので少し安心しています。その時優しく起こして頂いた患者さんは今でもよく覚えています。



消化器・乳腺・移植外科  
板本敏行(いたもと としゆき)

# 看護部だより

安心、安全な手術を提供します。



## 手術室

「手術室」という言葉から連想される言葉は皆さん「怖い、痛い、冷たい」こんなマイナスイメージだと思います。確かに実際、手術室の中は、外の景色が見える窓が一切なく、たくさんの器械、器材に囲まれた個室が①～⑫番まで10部屋並んでいます。

あれ？①～⑫番なのに10部屋？そうなんです。日本人の縁起を重んじる特性が④⑨という数字を消しているのです。しかし、それは私達手術室スタッフの本心とも相通ずるものがあります。私達が実際に患者様とかわることができるのは唯一手術前の術前訪問と手術中だけです。そのわずかな時間の中で「何とか苦しみから解放して差し上げたい。」「少しでも不安を取り除いて差し上げたい」と強く思っています。まさに一期一会の精神というわけです。そして何よりもほっとする瞬間は、患者様が無事に手術を終え、病室に帰られるときです。きれいごとではなく、手術に携わるすべてのスタッフが感じています。「怖い、痛い、冷たい」という不安をすべて消し去ることはできませんが、スタッフ一同丸となってがんばっていきこうと思っています。

